

中世から近代の辞書に見る字音の消長

—「物」—

黒沢晶子（東北文教大学）

akuros9638@gmail.com

【要約】

本稿では「物」という漢字の主な字音が室町時代の「もつ」から現代の「ぶつ」へと変化していった過程をたどる。室町時代、「遺物」は「ゆいもつ」、「器物」は「きもつ」と読まれていた。字音が変化した字音語を各時代の辞書で調べると、近代に入ってから「ぶつ」が使われるようになったものが多い。また、「物」字音語は、室町時代の『落葉集』では「もつ」と読む語が 72.1%、BCCWJ では「ぶつ」と読む語が 84.1%を占めており、主な字音が替わったことがわかる。さらに、BCCWJ の「物」字音語のうち『日本国語大辞典』の初出例が明治以降の言葉を見ると、67 語中 64 語が「ぶつ」と読むものだった。「無機物」「鉱物」「物資」等の近代語が西欧語から翻訳される際、造語によって「ぶつ」と読む語が急増したということができよう。このように、「物」は、古くから伝わる言葉が一部新しい字音で読まれ始める段階と新しく作られた言葉が新しい字音で読まれる段階を経て、字音「ぶつ」が増殖し定着していったと考えられる。

1. はじめに

本稿では、黒沢（2020）、黒沢（2021）に続いて、ある漢字の字音が変化していった過程をたどってみたい。本稿で取り上げるのは「物」という字である。

「物」という字の字音として、まず思いつくのは、「ぶつ」「もつ」どちらだろうか。おそらく「ぶつ」が頭に浮かぶのではないだろうか。それは、なぜなのか。

「物」は現代語でも「食物」のように「もつ」と読む言葉があり、決して「もつ」という字音がなくなったわけではない。だが、室町時代と現代を比べると、主な字音が「もつ」から「ぶつ」に替わっていることがわかる。その主な字音の交替を一つの変化と見なすことにしたい。



図1：遺物 ゆいもつ
室町中期『文明本節用集』
国会図書館

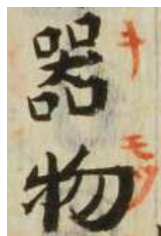


図2：器物 きもつ
室町中期『文明本節用集』
国会図書館

たとえば図 1 の言葉を漢字だけで見たら、現代の私たちは「いぶつ」と読むだろう。図 2 の言葉は「きぶつ」ではないだろうか。しかし、室町時代には、「遺物」は「ゆいもつ」、「器物」は「きもつ」と読まれていた。両図は、室町時代中期に作られた『文明本節用集（雑字類書）』と呼ばれる国語辞典の画像である。右側に書かれているのが字音、左側には、漢字ごとの意味が「のこる」「もの」のように書かれている。「遺物」は「遺」で始まる「遺跡」を筆頭に、それに続いて「物」が書かれ、「遺物」という語として掲げてある。

そこで、「ゆいもつ」がいつごろ「いぶつ」と読まれるようになったのか、「きもつ」がいつごろ「きぶつ」と読まれるようになったのか、各時代の辞書を調べてみた。

2. 隋唐音と呉音・漢音

日本語の主な漢字音、呉音と漢音は、中国の隋唐音にその元がある。「物」という字は、隋唐音で /mīuət/ だった。隋唐音が m- で始まる字は、呉音が表 1 のようにマミムメモで始まる音で日本語に受け入れられた。（隋唐音は、『広韻』王力の再構音。『韻天網』による。 i: 超短音。ゴシック：常用字音、日本語の字音：藤堂 2006）

表 1：隋唐音が m- で始まる字の呉音・漢音

	物	末	万（萬）	幕	米
隋唐音	mīuət	muat	mīwen	mak	miei
呉音	もち ¹	まち	まん	まく	まい
	もつ	まつ	—	—	—
漢音	ぶつ	ばつ	ばん	ばく	べい

それが中国の唐代長安音では、鼻音でなくなったものが多く、それを取り入れた日本語の漢音では、「ぶつ」「ばつ」「ばん」「ばく」「べい」のようにバビブベボで始まる音となった²。

ところで、表 1 の「物 もつ」「末 まつ」を呉音でなく慣用音³とする説もある。慣用音というのは、呉音や漢音、唐音と認められないけれども、古来よく用いられてきた音をいう（湯沢 1987）。しかし、「もつ」は慣用音ではなく呉音と考えたほうがいいことを本稿では示したい。

3. 研究課題および調査対象の辞書

研究課題は、次の三つである。

- (1) いつごろ「物」の字音が変化したのか。
- (2) 変化の段階が二つあるか、三つあるか
- (3) 室町時代の「もつ」から現代の「ぶつ」へという主な字音の変化は、どのようにして起きたの

¹ 「物」を「もち」と表記した例として、「捧物（ほうもち。神仏に捧げる供物）」が源氏物語に見える。

² なお、呉音漢音ともにマ行音で始まる字もある。「名 みょう、めい」、「明 みょう、めい」、「門 もん、もん」などである。

³ 慣用音の例としては、「硬（こう）」、「祉（し）」「耗（もう）」「格（こう：格子）」「合（がっ：合唱）」「宮（ぐう：神宮）」「後（ご）」「滞（たい）」「動（どう）」などが挙げられる。

か。

研究課題(1)については、室町時代から大正時代にかけての辞書の見出し語にどちらの読みが出ているかを見ていく。研究課題(2)については、室町時代は『落葉集』索引、現代は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を NLB というオンライン検索システムを用いて、「もつ」と「ぶつ」の勢力を比べるほか、『日本国語大辞典』で初出例を調べる。

表 2 が調査した辞書の一覧で、国語辞書、漢字字書、対訳辞書が含まれる。合わせて 12 の辞書中、近代のものが 7 種である。主に電子版を見た。

表 2：「物」字音語の読み調査対象の辞書

	種類	辞書名	写本 刊本 活版	西暦	和暦	電子化資料の 所蔵
1	国語	文明本節用集/雑字類書	写	—	室町中期	国会図書館
2	漢字	落葉集	刊	1598	慶長 3 刊	国文学研究資料館 学術情報リポジトリ
3	対訳	日葡辞書	活	1603-04	慶長 8-9 刊	——
4	国語	和漢音釈 書言字考 合類大節用集	刊	1717	享保 2 刊	早稲田大学
5	国語	江戸大節用海内蔵 カタイガラ	刊	1834 増 補、1863 補刻	天保 4 増補 文久 3 補刻	国文学研究資料館 新日本古典籍 総合データベース
6	対訳	和英語林集成 第 3 版	活	1886	明治 19 刊	明治学院大学
7	対訳	漢英対照いろは辞典	活	1888	明治 21 刊	国会図書館
8	国語	和漢雅俗いろは辞典	活	1889	明治 22 刊	国会図書館
9	国語	言海	活	1889-91	明治 22-24 刊	国会図書館
10	対訳	和英大辞典 (ブリタニカ)	活	1896	明治 29 刊	国会図書館
11	対訳	日台大辞典	活	1907	明治 40 刊	国会図書館
12	国語	大日本国語辞典	活	1915-19	大正 4 刊	国会図書館

辞書画像は、辞書名欄・所蔵欄の情報、和暦等によって検索することができる。

4. 「物」の字音調査結果と考察

4. 1. 「物」の字音を調査した見出し語等

表 3 に示すように、「物」を含む見出し語が『落葉集』と『日葡辞書』の両方にあって、かつ『明鏡国語辞典』第三版にも見出し語、ないしその他の読みとして載っている条件を満たすものは、23 語ある。これは室町時代に存在し、現代語としても辞書に掲載されているということである。現代語の読みで、「もつ」9 語、「ぶつ」11 語、「もつ・ぶつ」3 語である。これら 23 語を字音の変化を調べるため

の検索語とした⁴。

調査結果として、まず同じ読みを維持した熟語が 12 語あった。「禁物：きんもつ」「供物：くもつ」「質物：しちもつ」「腫物：しゅもつ」「書物：しょもつ」「進物：しんもつ」「物相：もっそう」「礼物：れいもつ」の 8 語が「もつ」、「景物：けいぶつ」「見物：けんぶつ」「好物：こうぶつ」「名物：めいぶつ」の 4 語が「ぶつ」と読むものである。このうち、「物相：もっそう」は、飯を盛ってはかる器の意である。

表 3：検索語（読みは現代語）23 語 ゴシック：もつ

	見出し語	読み		見出し語	読み		見出し語	読み
1	逸物	いちもつ・いちぶつ	9	財物	ざいぶつ・ざいもつ	17	唐物	とうぶつ
2	遺物	いぶつ	10	質物	しちもつ	18	万物	ばんぶつ
3	器物	きぶつ	11	腫物	しゅもつ	19	無一物	むいちもつ・むいちぶつ
4	禁物	きんもつ	12	食物	しょくもつ	20	名物	めいぶつ
5	供物	くもつ	13	書物	しょもつ	21	物相	もっそう
6	景物	けいぶつ	14	人物	じんぶつ	22	薬物	やくぶつ
7	見物	けんぶつ	15	進物	しんもつ	23	礼物	れいもつ
8	好物	こうぶつ	16	代物	だいぶつ			

4. 2 「物」の字音が変化した語群

次に、「物」の字音が変化した語群を表 4 に示す。

表 4：「物」の字音が変化した語群 11 語 (数字は表番号)

変化	見出し語	変化	見出し語
もつ → ぶつ	器物 5	もつ → ぶつ・もつ	財物 9
	遺物 6		無一物 10
	唐物 7	→ ぶつ	逸物 11
	薬物 8		代物 12
		ぶつ → ぶつ・もつ → ぶつ	人物 13
		もつ → ぶつ → もつ	万物 14
			食物 15

「もつ」から「ぶつ」に替わったのが「器物」「遺物」「唐物」「薬物」である。「財物」「無一物」「逸

⁴ 条件を変えて、『落葉集』と『日葡辞書』の両方、ないしは、そのどちらか」にすると、さらに 8 語が該当する。「造物」「毒物」「風物」（『落葉集』もつ）、「私物」（『日葡』mot）」が現代語と読みの異なるもの、「物色」（『落葉集』ぶつ）、荷物・宝物（『日葡』mot）、「物騒」（『日葡』but）が現代語と同じ読みを持つものである。

物」「代物」は「もつ」だけだったのが「ぶつ」でも載るようになった。その後、「代物」は「ぶつ」に落ち着いている。「人物」は、ほとんどの辞書で「ぶつ」だが、『日葡辞書』には「ぶつ・もつ」両方が載る。「万物」は、「ぶつ」から始まって、「ぶつ・もつ」両方が辞書に載るようになったが、現代では「ぶつ」となっている。また、「食物」は「もつ→ぶつ→もつ」のように変化した珍しい例である。この 11 語が字音に変化のあった言葉である⁵。次に、これらの語の字音の変化をひとつずつ見ていきたい。

「器物」は、表 5 のように、室町時代「もつ」と書かれていたが、江戸中期の辞書から先は「きぶつ」として出てくる。変化の時期としては、早い方の例である。

表 5: 「器物」 きもつ → 江戸中期以降 きぶつ

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用	ヘボン和英 語林集成
器物	もつ	もつ	mot	ぶつ	ぶつ	BUTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
ぶつ	ぶつ	ぶつ	butsu	ぶつ	ぶつ	ぶつ

「遺物」(表 6) は室町、江戸期を通じて「ゆいもつ」と読まれていたのが明治になってヘボンの『和英語林集成』第三版以降の辞書では、「ゆいもつ」と「いぶつ」両方の読みが見出しに現れている。それが、現代になると、「ゆいもつ」は見出しからなくなり、「いぶつ」だけが残る。

表 6: 「遺物」 ゆいもつ → 明治以降 ゆいもつ・いぶつ

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用	ヘボン和英 語林集成
遺物	もつ	もつ	mot	もつ	もつ	BUTSU・ MOTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
もつ・ ぶつ	もつ・ ぶつ	もつ・ ぶつ	motsu・ butsu	もつ・ ぶつ	もつ・ ぶつ	ぶつ

⁵ 「物」で始まる語では「物故」が「もっこ」(『文明本節用集』)が「ぶっこ」に変化している。この語は『落葉集』『日葡辞書』には載っていないため、本稿では取り上げていない。

「ゆいもつ」は「ゆい」「もつ」どちらも呉音同士の組み合わせである。それに対して、「いぶつ」の「い」「ぶつ」は、漢音同士となっている。

「ゆいもつ」と「いぶつ」には意味上の重なりと違いが見られる。「ゆいもつ」は、「死者などがのこした物」つまり遺品、かたみを指す。一方、「いぶつ」にも辞書上同じ意味があるが、現在「いぶつ」と言うと、「遺跡から出た大昔の品物」を指すことが多いと思われる。「いぶつ」は「ゆいもつ」を漢音で読み替えただけでなく、専ら新しい意味で使われるようになったと言えそうである。

「唐物」(表 7) とは、中国や外国から渡来した品物、舶来品のことである。室町、江戸の辞書では「とうもつ」となっていたが、明治になると「とうぶつ」に替わる。

表 7:「唐物」 とうもつ → 明治以降 とうぶつ

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用	へボン和英 語林集成
唐物	NA	もつ	mot	NA	もつ	BUTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
ぶつ	ぶつ	ぶつ	butsu	ぶつ	ぶつ	ぶつ

「薬物」(表 8) は、掲載している辞書に限られていて、細かくはわからない。室町時代の辞書では「やくもつ」「Yacumot」だが、明治以降は「やくぶつ」となっている。調査した江戸時代の辞書が少なく、江戸時代の読みが不明なため、確かなことはわからない。だが、遅くとも 1886 年の辞書には「やくぶつ」が登場し、現代語に引き継がれている。

表 8:「薬物」 やくもつ → 1886 やくぶつ 出現

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用	へボン和英 語林集成
薬物	NA	もつ	mot	NA	NA	BUTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
NA	NA	NA	butsu	NA	ぶつ	ぶつ

「財物」(表 9) は、室町時代から江戸時代を通して「ざいもつ」と書かれてきたが、1888 年の辞書

に初めて「ざいぶつ」が現れる。その後、再び「ざいもつ」だけになるが、1915 年の『大日本国語辞典』になって、改めて「ざいもつ」と「ざいぶつ」両方が載るようになり、現代に至っている。

表 9：「財物」 ざいもつ → 1888 ざいぶつ 出現

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考合類大節用	江戸大節用	へボン和英語林集成
財物	NA	もつ	mot	もつ	もつ	MOTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
もつ・ぶつ	もつ	NA	motsu	もつ	もつ・ぶつ	もつ・ぶつ

「無一物」(表 10) は、室町時代から現代に至るまで、「むいちもつ」という読みが載っているが、1907 年の辞書に「むいちぶつ」が登場する。現代の辞書では「むいちもつ」を主見出しとし、「むいちぶつ」を副としている。「むいちもつ」が現代語の辞書でも主たる読みとして保たれているのは、「無一物」が禅語「本来無一物(事物はすべて本来空(くう)であるから、執着すべきものは何一つない)」に由来するためかと思われる。本稿では、「もつ」は「物」の呉音だという見方をとっている。その呉音は、漢音伝来後も仏教經典の読誦に用いられており、それが仏教界のアイデンティティの確認でもあった(中澤 2011) という。仏語として使われ続けてきたことで「むいちもつ」の読みが維持され、辞書にも反映されていると考えてよいだろう。

一方、近代になって「ぶつ」が現れた点は「代物」「財物」と似通っている。「ぶつ」への変化に、近代、大きな力が働いていたことがうかがわれる側面を併せ持つ例だと言える。

表 10：「無一物」 むいちもつ → 20 世紀になって辞書に「むいちぶつ」登場

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考合類大節用	江戸大節用	へボン和英語林集成
無一物	NA	もつ	mot	もつ	もつ	MOTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
もつ	もつ	NA	motsu	もつ・ ぶつ	もつ	もつ・ ぶつ

「無一物(むいちぶつ)」の用例を『日本国語大辞典』で見ると、1892 年に樋口一葉が書いた小

説にあり、辞書（『日台大辞典』1907）より早い時期の使用例となっている。

(1) 無一物（ムイチブツ）ほど気楽なるはあらざるべし

（何ひとつ持っていないほど気楽なことはないだろう）（樋口一葉 1892 「別れ霜」 総ルビ）

一方、「むいちもつ」と読む例は、(1)よりしばらく後の志賀直哉の作品にもある。「むいちぶつ」と並行して「むいちもつ」が使われていたことがわかる例である。

(2) 泥棒に入られて今は殆ど無一物（ムイチモツ）になっちまったと云ふんだがね

（志賀直哉 1921-37『暗夜行路』）

「逸物」（表 11）は、群を抜いてすぐれているものをいう。特に、馬・鷹・犬などに使うほか、人にも言う。室町時代も現代も「いちもつ」が一般的な読みだが、大正時代や現代の辞書には「いちぶつ」も載っている。なお、『明鏡国語辞典』の見出し語は「いちもつ」で、その項に他の読みが載っている。

表 11：「逸物」 主に 「いちもつ」

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用	へボン 和 英語林集成
逸物	いつもつ	いちもつ	Ichimot	NA	いちもつ	ICHIMOTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
いちもつ	いちもつ	いちもつ	Ichimotsu	いちもつ	いちもつ いちもち いちぶつ	いちもつ いつもつ いちぶつ いつぶつ

「代物」（表 12）は、かわりのもの、あるいは代金という意味で、室町時代から明治に至るまで「だいもつ」の形で辞書に掲載されている。それが大正時代の『大日本国語辞典』では「だいもつ・だいぶつ」が並び、現代の『明鏡国語辞典』では「だいぶつ」のみとなっている。表 11 の「逸物」とよく似た経過をたどっているが、現代語で「ぶつ」と読むようになった点において大きく異なっている。

表 12 : 「代物」 だいもつ → 大正時代に「だいぶつ」出現

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用	へボン和英語林集成
代物	だいもつ	だいもつ	Daimot	だいもつ	だいもつ	DAIMOTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
だいもつ	だいもつ	だいもつ	Daimotsu	だいもつ	だいもつ・ だいぶつ	だいぶつ

「人物」(表 13) は、室町から現代までほとんどの辞書に「じんぶつ」として出ており、それは現代語の読みでもある。『日葡辞書』だけが「じんぶつ」「じんもつ」二つの見出し語を持つだけでなく、「じんぶつ」は人の容貌・外見を指し、「じんもつ」はこの世にある人間とその他の物を意味するというふうに、異なる意味が記述されている。

表 13 : 「人物」 主に「じんぶつ」

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用	へボン和英語林集成
人物	ぶつ	ぶつ	mot・but	ぶつ	ぶつ	BUTSU
1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
ぶつ	ぶつ	ぶつ	but	ぶつ	ぶつ	ぶつ

「万物」(表 14) は読みとして「ばんぶつ」だけが載っている辞書もあるものの、室町時代から「ばんもつ」も見られ、明治・大正時代の辞書にも両方が出ている。『日本語歴史コーパス』を見ると、「ばんもつ」「ばんぶつ」どちらの例も多く見られるが、現代は、再び「ばんぶつ」だけになっている。

表 14 : 「万物」 ばんぶつ → ばんぶつ・ばんもつ → ばんぶつ

	室町中期	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考	江戸大節用	和英語林集成
万物	ぶつ	ぶつ	but mot	NA	ぶつ	BUTSU MOTSU

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
ぶつ もつ	ぶつ もつ	ぶつ もつ	butsu motsu	ぶつ もつ	ぶつ もつ	ぶつ

次節では、字音に変化のあった見出し語のうち、「もつ → ぶつ → もつ」という珍しい変遷をたどった「食物」を取り上げ、やや詳しく見ていきたい。

4. 3 「食物」の読みの複雑な変化

「食物」は多少複雑な変化を示しているため、中世の辞書『運歩色葉集』と『易林本節用集』を加えて、その変遷をたどってみたい（表 15）。室町時代には、『文明本節用集』に「しょくぶつ」、『運歩色葉集』（1548 序、1571 写）に「じきもつ」、『易林本節用集』（1597）に「しょくもつ」が載っている。この三者が江戸時代になると「しょくもつ」に一本化されていくのである。『落葉集』と『日葡辞書』の見出し語は、中世末における「しょくぶつ」「じきもつ」という二つの字音の併用を表している。なお、「じきもつ」は 1915 年の『大日本国語辞典』にも出ているが、その用例は保元物語（1221 以降の成立）であり、近代のものではない。

表 15：「食物」 じきもつ → しょくぶつ → しょくもつ

	室 町 中 期	1548/ 1571	1597	1598	1603	1717	1834	1886
辞書	文明本 節用集	運歩 色葉集	易林本 節用集	落葉集	日葡 辞書	書言字考 合類大節用	江戸 大節用	ヘボン和英 語林集成
しょく-	ぶつ	NA	もつ	ぶつ	but	もつ	もつ	MOTSU
じき-	NA	もつ	NA	もつ	mot	NA	NA	NA

1888	1889	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
漢英対照 いろは	和漢雅俗 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
もつ	もつ	もつ	motsu	もつ	もつ	もつ
NA	NA	NA	NA	NA	もつ	NA

「食物（しょくもつ）」の語誌（『日本国語大辞典』）を見ると、次のことが書かれている。

- (3) じきもつ (呉音+呉音)：古い形を残すものか
 しょくぶつ (漢音+漢音)：中世末には「じきもつ」とともに一般的に
 しょくもつ (漢音+呉音)：『易林本節用集』に見られ、後には、これが一般化する

図3～5に室町時代の辞書に現れた「食物」の読み（しよくぶつ、じきもつ、しよくもつ）を示す。



図3：食物 しよくぶつ
室町中期『文明本節用集』
国会図書館

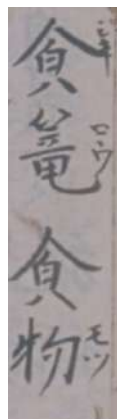


図4：食物 じきもつ
1548『運歩色葉集』
京都大学

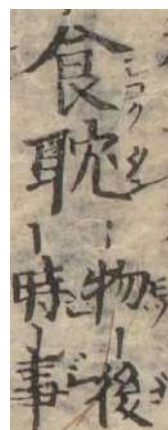


図5：食物 しよくもつ
1597『易林本節用集』
国文学研究資料館

では、呉音と漢音とは、どのように併存していたのだろうか。この問いに関連して、熟語のもう一方の字である「食」の字音を『易林本節用集』で見ると、呉音の「じき」で読むのが「食堂（じきだう。寺院で僧たちが食事をする建物）⁶」「食籠（じきろう。食物を入れる蓋付きの容器）」、漢音の「しよく」で読むものとして「食物」のほかに「食耽（しよくたん。むさぼり食うこと）」「食後（しよくご）」「食時（しよくじ）」「食事（しよくじ）」などが載っており、呉音漢音ともに使われていたことがわかる。「食物（しよくもつ）」という現代につながる読みは、そうした中で現れた早い例となっている。だが、どのようにして、「しよく」が一般化して現在に至ったのかの詳細は今後の課題である。

ここで、「じきもつ」「しよくぶつ」「しよくもつ」が辞書の外で実際にどのように使われていたのか見るために、「食物」の用例を『日本語歴史コーパス』（CHJ）で調べてみた。その方法として、書字形出現形が「食物」で、底本のふりがな、あるいはローマ字表記が「じきもつ」「しよくぶつ」「しよくもつ」のいずれかであるものを抽出した⁷。底本のふりがなには、校訂者の判断でつけたものと原本にふりがながあったものがある。

まず「じきもつ」は1120年頃成立した今昔物語集に出ている。

(4)「じきもつ」と校訂者のふりがなのある用例⁸

食物（じきもつ）無シト云ヘドモ、谷ノ水ヲ飲テ有ルニ…
（CHJ 今昔物語集 1120頃）

⁶ 「しよくどう」と読み、食事をする部屋・店を意味するようになったのは明治時代（『日本国語大辞典』）。

⁷ 「食物」のふりがな中、字訓（くひもの、たべもの）は除いた。ふりがながあるもの419件中、「くひもの」は平安時代から近代に至るまで66件、「たべもの」は江戸後期から近代にかけて34件。

⁸ 書字形出現形「食物」に「じきもつ」あるいは「くひもの」とふりがながあるのは、校訂者が『類聚名義抄』『節用集』などの辞書を参考にして施したものだと、底本になった『今昔物語集』の凡例にある。なお、語彙素は、それぞれ「食物」「食い物」のように分かれている。

書字形「食物」に「じきもつ」とふりがながあるのは 89 件で、すべて『今昔物語集』である。

次に、「しょくぶつ」はキリシタン文学『天草本伊曾保物語』（イソップ物語）にポルトガル語式ローマ字で書かれたものがある。これが 1593 年刊で、『落葉集』『日葡辞書』と同時代の例である。綴りを見てわかるように、この時代は「ぶつ」ではなく、元の中国語音に近い「ぶつ」と発音していた。そのことは橋本（1980）、沼本（1986）などによって知られている⁹。CHJ においてローマ字ないしはふりがなで「しょくぶつ」と読まれた例は、(5)に示すこの 1 件以外は、実は明治・大正の 10 件である¹⁰ ((6)に例)。辞書の読みからは姿を消した「しょくぶつ」が実際には近代になってからも使われていたことがわかる。

(5) 「食物（しょくぶつ）」がポルトガル語式ローマ字で書かれた例

酒が無うては食物（xocubut）ばかりは然のみ望ましゅうも無い

（CHJ 『天草本伊曾保物語』 1593 刊 原文は全体がローマ字表記）

(6) 「食物」に「しょくぶつ」と原本にふりがなのある用例

食ひたいのを我慢し、且つ比較的不味い食物（しょくぶつ）に、二三ヶ月の間甘んじなくてはならぬのだから、……

（CHJ 『女学世界』 1909）

「食物（しょくもつ）」は、最も早い例が江戸末期の人情本に 1 件出ている((7))。

(7) 「食物」に「しょくもつ」と原本にふりがなのある用例

おしゆんは潜（ひそか）に薪小屋へ食物（しょくもつ）をはこびつつ。…

（CHJ 人情本 1833）

「しょくもつ」とふりがなのある例は、この後江戸末期から大正時代にかけて、『日本語歴史コーパス』に 201 件あり¹¹、この読みが一般的になっていったことを示している。(6) と(8) は同じ雑誌の同じ年の例であり、「食物」の読みは「しょくもつ」が優勢ではあるが、「しょくぶつ」も少数ながら使われていたことを表してもいる。

(8) 「食物」に「しょくもつ」と原本にふりがなのある用例

すべて学校の教科書は面白味はないが、極めて大切なもので食物（しょくもつ）に譬へれば

⁹ 橋本進吉（1980）は平安時代から室町時代にかけて、日本語に漢語が数多く入ってきたことから、それまで日本語になかった撥音や促音で終わる音が採り入れられたとしている（「国語音韻の変遷」）。また、沼本（1986）は、入声韻尾 -t は、かなで「〜ち」「〜つ」と表記されているが、室町時代のキリシタン資料などによって、その時代まで -t のまま短促性を保って学習されていたものと考えられる（pp. 40-42）としている。また、「〜ち」「〜つ」のうち、専ら「〜つ」が使われるようになっていったのは、「つ」の方が t の閉塞性の表記により適切であったためと述べている（p.173）。

¹⁰ ほかに「副食物（ふくしょくぶつ）」が 5 件あるが、これは「食物」とは別語と考え、数えていない。

¹¹ ほかに「副食物（ふくしょくもつ）」が 7 件あるが、「食物」とは別語と見なし、数えていない。

お米の御飯のやうなものである。

(CHJ 『女学世界』 1909)

CHJ では、(9) のように「じきもつ」「しょくぶつ」「しょくもつ」の順で日本語に現れ、重なった時期もあるが、現在は「しょくもつ」が生き残っている。「もつ」のほうが残ったのは珍しいと言える。

(9) じきもつ —————

しょくぶつ —————→

しょくもつ —————→

5. 考察：研究課題の答え

5. 1 いつ「物」の字音が変化したのか まとめ

ここで、ひとつめの研究課題の答えをまとめたい。ここまでに見てきた 11 語の字音が変化した時期は、早いもので室町末、多くは明治・大正時代である（表 16）。

変化の中には、最終的に「もつ」に落ち着いた「食物（しょくもつ）」のような例外もあるが、主な変化は、「もつ」から「ぶつ」への交替だったと言えそうである。表 16 に現代語が「ぶつ」であるか「ぶつ」を含むものをゴシックで表示した。11 語中、「食物」以外の 10 語が該当する。

第 2 節で触れたように、「もつ」という字音は、漢和辞典によっては呉音でなく、慣用音とされている。だが、もし「もつ」を慣用音だとすると、慣用音から漢音に替わったことになってしまう。「もつ」を呉音と考えれば、呉音から漢音への変化ということで、自然な流れの中に位置づけることができると思われる。最も古くから使われていた「じきもつ」が呉音同士の組み合わせだという方が「じきもつ」、「しょくぶつ」という順番をうまく説明できるわけである。また、呉音を使い習わしてきた仏教で「無一物」が「むいちもつ」と読まれることも「もつ」を呉音とする見方を支持するのではないか。

表 16：「物」の字音（辞書上の）変化した時期 ? : 時期の確定しがたいもの

変化	見出し語	変化の時期	変化	見出し語	変化の時期
もつ ↓ ぶつ	器物	江戸中期	もつ → ぶつ・もつ	財物	明治
	遺物	明治		無一物	大正 ¹²
	唐物		→ ぶつ	逸物	大正 ¹³ → 現代
	薬物	明治?	ぶつ→ぶつ・もつ → ぶつ	代物	室町末 現代
			もつ → ぶつ → もつ	食物	室町末～江戸中期 現代

そして、ここでもう一つ、別の小さな調査をしてみた。室町時代の日本語がわかる『落葉集』には、

¹² 「大正」は、「ぶつ・もつ」が辞書に記載された時期を示す。

¹³ 「大正」は、「ぶつ・もつ」が辞書に記載された時期を示す。

61 語の「物」を含む字音語がある。また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を NLB で検索すると、170 語の「物」を含む字音語 (名詞) が抽出される。その読みを比べると、『落葉集』では「もつ」と読む見出し語が 44 語で全体の 72.1%、BCCWJ では、「ぶつ」と読む言葉が 143 語で 84.1% を占めており、主な字音が替わったことがわかる (図 6)。

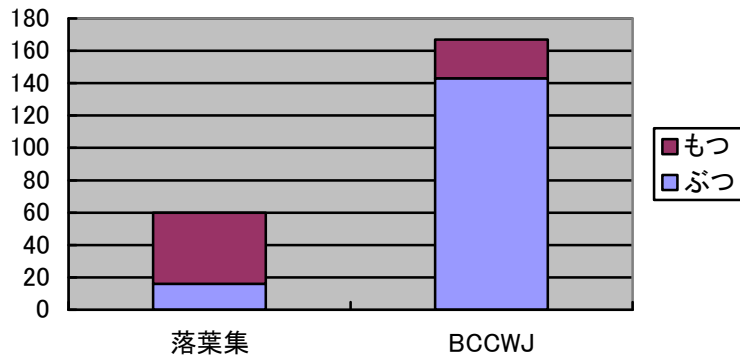


図 6：室町時代と現代の「物」字音語の字音

また、BCCWJ の字音語のうち『日本国語大辞典』の初出例が明治以降の言葉を見ると、67 語中 64 語が「ぶつ」だった。その中には「印刷物」「鉱物」「脊椎動物」「炭水化物」「天然記念物」「農産物」「博物学」「微生物」「物資」「物流」「放物線」「有機物」「唯物」などが含まれる。このように、近代になって作られた言葉の大部分が「ぶつ」と読まれるものだったことも明らかである。

5. 2 変化の 2 段階は「物 (もつ→ぶつ)」にも当てはまるか

研究課題の 2 番目は、変化の段階がどのようなものだったかということだった。

字音の変化には、初めに、古くから伝わる言葉が一部新しい字音で読まれ始める段階がある。黒沢 (2020) で取り上げた「打 (だ)」、黒沢 (2021) の「眠 (みん)」は、主に江戸時代にそれぞれ「た」「めん」から交替している。本稿の「物」(「もつ」から「ぶつ」へ) の変化では、「器物」「遺物」「唐物」「薬物」「代物」などがこの段階があったことを示す例である。

次に、新しく作られた言葉が新しい字音で読まれる段階があり、これがその新しい字音を定着させていく力になると考えられる。本稿では、明治以降に造られた「鉱物」「農産物」「博物学」「有機物」「唯物」「物資」などがこの二つ目の段階を示す例である。

ところで、「眠」の「めん」から「みん」への移行には、もう一つの段階として、古い時代にあったけれども、継続して辞書に掲載されなかった言葉が、近代になって新しい字音で復活する例が見られた。だが、今回の「物」の「もつ」から「ぶつ」への交替には、このような例は見当たらなかった。従って、「もつ」から「ぶつ」への交替に関しては、三つではなく、二つの段階があったといえる。

5. 3 「もつ」から「ぶつ」へ：主な字音の変化はどのようにして起きたのか

研究課題の 3 番は、主な字音の変化がどのようにして起きたのかということだった。室町時代は「もつ」が中心的だったのが、近代から現代には「ぶつ」が主な字音になっていった。この変化はどのようにして起きたのだろうか。

その答えとしては、近代語が英語、ドイツ語などから翻訳される際、造語によって「ぶつ」と読む字音語が急増したといえる。まず、この字は「物、品物、物質」という意味を持ち、造語性の非常に高い字であることに注目したい。次に、江戸時代から明治にかけて、「器物」「遺物」「唐物」「薬物」「代物」などの字音が「もつ」から「ぶつ」に移行していった。そして、近代、多くの新造語が生まれた際、使われたのも「ぶつ」だった。

次に挙げるのは、BCCWJ を NLB で検索して抽出された「物」字音語のうち、『日本国語大辞典』の初出が明治以降の言葉の例である。

- ・ ○物：無機物、鉱物、農産物、有機物、唯物、印刷物など
- ・ 物○：物権、物資、物税、物納、物量、物流など、

5.1 でも述べたように、67 語中、64 語が「ぶつ」で読むものである。

「もつ」と読むのは「小荷物」「手荷物」「振り分け荷物」の3語であり、「荷物」の派生語である。「荷物」は15世紀中期に初出のある語で、「もつ」という字音は変わらなかった¹⁴。

呉音の「もつ」から漢音の「ぶつ」へと代表的な字音が移っていったのは、このようなプロセスを経てのことだったといえることができる。

6. 今後の課題

まず、呉音・漢音・慣用音を含めて、個別に字音が変わっていった時期を特定すること、次に、変化にどのような段階があるかを検証すること、さらに、なぜ／どのように変化したかを考えること、そして、慣用音かどうか判断が分かれる字について、字音の変化が判断材料になるかどうか検討することを今後の課題としたい。

参考文献

- 小川誉子美 (2020) 『蚕と戦争と日本語－欧米の日本理解はこうして始まった』 ひつじ書房
- 黒沢晶子 (2011) 「中国語母語話者と入声音－『循環型社会をジゲンし』とは？－」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.23, 137-145.
- 黒沢晶子 (2013) 「漢字音教材開発－入声音を含む漢語の音変化をどう扱うか－」 『日本語教育方法研究会誌』 20-1.
- 黒沢晶子 (2015) 「漢字音教材開発－音符の活用－」 『日本語教育方法研究会誌』 22-1.
- 黒沢晶子 (2016) 「漢字音の長音教材－中国語母語話者と非母語話者を対象に」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.29, 147-157.
- 黒沢晶子 (2017) 「漢字音の清濁を何から見分けるか」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.30, 103-117.
- 黒沢晶子 (2018) 「音符は漢字音学習にどのくらい活かせるか－カ・タ・ナ・ハ・マ行－」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.31, 22-34.
- 黒沢晶子 (2019) 「常用漢字の字音を音符で見分ける－長さの違いはどこから来たか－」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.32, 68-82.
- 黒沢晶子 (2020) 「中世から近代への字音の消長－「打」－」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.33, 48-65.
- 黒沢晶子 (2021) 「中世から近代への字音の消長－「眠」－」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.34, 51-62.

¹⁴ 「荷物」は『落葉集』に載っていないため、本稿の辞書調査では取り上げていない。

国語学会編（1976）『国語史資料集－図録と解説－』武蔵野書院
 小島幸枝（1978）『耶蘇会板「落葉集」総索引』笠間書院 国文学研究資料館学術情報リポジトリ
 今野真二（2012）『日本語学講座第5巻『節用集』研究入門』清文堂
 佐藤貴裕（2019）『近世節用集史の研究』武蔵野書院
 佐藤貴裕「節用集の世界」<https://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/rekishi.html> 2020年8月20日閲覧
 藤堂明保（1957/1980a）『中国語音韻論－その歴史的研究』光生館
 藤堂明保（1980b）「中国の文字とことば」藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社
 中澤信幸（2011）「呉音について」『日本語学』30-3.
 中田祝夫（2006）『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引 影印篇・索引篇』勉誠出版
 沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』東京堂出版
 沼本克明（2014）『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ずる一字音仮名遣い入門－』汲古書院
 橋本進吉（1980）「国語音韻の変遷」『古代国語の音韻に就いて』所収 岩波文庫
 森田武（1993）『日葡辞書提要』清文堂出版
 山田俊雄（1978）『日本語と辞書』中央公論社
 湯沢質幸（1987）「漢字の慣用音」佐藤喜代治編『漢字講座 第3巻（漢字と日本語）』明治書院
 吉田金彦（1971）「辞書の歴史」阪倉篤義編『講座国語史第3巻 語彙史』大修館書店

参考資料

韻典網 2.6 版 <<http://ytenx.org/kyonh/>> 『広韻』『中原音韻』等の韻書の検索ができる。声母、韻母の再
 構音一覧を付す。『広韻』のデータは、『宋本 広韻データ』に基づいている。
 北原保雄編（2021）『明鏡国語辞典 第三版』大修館書店
 国立国語研究所（2021）『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』(BCCWJ) ver. 2021.03
 <<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>
 国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス（CHJ）』バージョン 2022.03
 <<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>
 国立国語研究所（2022）NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) <<https://nlb.ninjal.ac.jp/>>
 国立国会図書館デジタルコレクション <<https://dl.ndl.go.jp/>>
 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース <<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>>
 小学館国語辞典編集部編（2005-2006）『精選版日本国語大辞典』小学館
 日本近代辞書・字書集（2014-16）上智大学学術研究特別推進費重点領域研究
 <<https://www.joao-roiz.jp/JPDICT/>>
 宋本広韻データ<<http://kanji-database.sourceforge.net/dict/sbgy/index.html>>
 科研費 基盤研究 C「次世代古典文献データベース構築の基礎的研究」（平成 14～16 年度、課題番号：
 14510494、研究代表者：村越貴代美）による成果の一
 土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
 藤堂明保編（1980b）『学研漢和大字典』学研
 藤堂明保編（2006）『漢字源』学研
 森田武編（1995）『邦訳日葡辞書・邦訳日葡辞書索引』岩波書店
 Japan Knowledge オンライン辞書・事典検索サイト <<https://japanknowledge.com>>